

夫をすると左下の3の点から右上の4の点への移動がスムーズになる。

第5節 点字学習の基礎としての話し言葉の学習

点字を学ぶ前の盲幼児児童にとっても、話すことに意欲や興味を持ち、経験したことを楽しみながら言語化する方法を学習することは、その後の点字の読みや書きの学習の基礎となる。文、文節、単語、音(拍)というひとつつながりの概念を、言語活動(聞く・話す)を通して学習することによって、言葉だけでなく、思考や認識も育てていくことにつながる。

そこで本節では、話し言葉の要素を分解・構成して、これらの関係を明確に意識付けることを取り上げる。さらに、点字の読み書きの学習のレディネスとして、音による単語の分解・構成の学習を取り上げる。

1 話し言葉の要素の分解・構成

いろいろな言葉遊びを通し、楽しい雰囲気の中で、単語を使って文を作る練習を行っていく。そして、日常の会話は関係性のあるいくつかの言葉の組み合わせで成り立っていることに気付き、言葉を組み立てて、自分が経験したことを詳しく話すことができるようにする。

(1) 「どうしたかな」

〈ねらい〉

「だれが・何を・どうした」の文の形で、いろいろな動作を言い表す練習をする。

〈内容〉

教師は、例えば「ボール」を用意して盲幼児児童が触った後、「先生がこのボールを使って何をしたか当ててください。」と言って動作をする。「先生がボールを」まで言ってボールを転がすと、盲幼児児童は「転がしました。」と言い、もう一度初めから「先生が ボールを 転がしました。」と言って正しい言い方に気付くようにする。

同様に、教師が「〇〇さんがりんごを持っています。どうするのでしょうか。」と言って盲幼児児童は動作を考える。「食べた」、「かじった」など言い、動作化するように促す。次にそれを正しい言い方で話すようにする。一番初めは、動作をしている人の名前、2番目は、物の名前、

3番目は、したこと、と確認した上で「〇〇さんが りんごを 食べました。」「〇〇さんが りんごを かじりました。」など、それぞれの動作に対応させて言うようにする。

「〇〇さんが ピアノを 弾きました。」「〇〇さんが たいこを たたきました。」「〇〇さんが ろうかを 歩きました。」など、それぞれの動作を行いながら、正しい言い方で言うように促す。

(2) 「だれが（何が）したかな」

〈ねらい〉

- ・ 2文節の文を作る。
- ・ 「だれが」「どうした」を意識する。

〈内容〉

教師は、人形を盲幼児児童に渡し、「この人形の名前は、〇〇さんです。」と言う。そして人形を使って、「〇〇さんが 立った。」「〇〇さんが 座った。」「〇〇さんが 寝た。」と言うよう促す。また、盲幼児児童の中の一人が動作をして同じように「△△さんが 立った。」「△△さんが座った。」「△△さんが 寝た。」などと言うように促す。

次に、教師が前半を言って、盲幼児児童に後半を言うように促すゲームをする。例えば、「せみが」→「鳴いた」とか、「金魚が」→「泳いだ」などのように行う。

今度は、「〇〇さんが 立った。」「〇〇さんが 座った。」「〇〇さんが 寝た。」の三つの文を比べ、どの文にも「〇〇さんが」という同じ部分があることに気付くようにする。また、「〇〇さんが 寝た。」「△△さんが 寝た。」「ねこが 寝た。」の三つの文の中には、「寝た」という同じ部分があることに気付くようにする。

(3) 「どんなかな」

〈ねらい〉

具体物を詳しく説明している言葉と、されている言葉を用いて、詳しく話す力を育てる。

〈内容〉

大きさの違う2種類のボールを触り、「大きい ボール」、「小さい ボール」と言うように促す。ボールを交互に渡し、「〇〇さんは 大きい ボールを 持っている。」「△△さんは 小さい ボールを 持っている。」と言うように促す。同様に、「厚い 本」・「薄い 本」、「長い

棒」・「短い 棒」など、できるだけ実物に即して言語化していく。

(4) 「何をしたかな」

〈ねらい〉

実際に経験したことを文の形にして話す力を育てる。

〈内容〉

盲幼児児童と近くの公園や広場に出かけ、そこで触ったり、見たり、聞いたりしたことを「〇〇さんが ぶらんこに のりました。」、「△△さんが 転びました。」などのように、口頭作文の形で話すようにする。

この時期の盲幼児児童には、「あのね、〇〇ちゃんがね、りんごをね、おいしいおいしってね、食べちゃってる……」というような話し方がみられる。このような話し方は、自由に話す雰囲気をつくるという点では大切であるが、教師が話の内容を整理し、表現の仕方に気付くよう指導していく必要がある。

【留意事項】

- (1) 盲幼児児童の心が動く場面を見逃さず取り上げ、自分が経験したことを伝えることに喜びを感じ、教師や友達との会話を楽しみながら言葉を育てる。
- (2) 楽しい遊びの雰囲気の中で、実物と言葉との結び付きに気付き、経験したことを言葉で表現する力を育てる。

2 音による単語の分解・構成

日本の点字は、日本語の音に一対一で対応している。点字学習の前提として一つ一つの音を意識するよう促し、音によって単語を分解したり、逆に音を組み合わせる単語を構成したりする。

(1) 「当てっこ」

〈ねらい〉

単語を音に分解する力を育てる。また、逆に、音を組み合わせる言葉にする力を育てる。

〈内容〉

盲幼児児童が日常親しんでいる物の中から2音で構成されている物を選ぶ。例えば、いすを選び、教師がゆっくり区切って、「い・す」と言い、「さあ、何でしょう。」と言って盲幼児児童が「いす」と当て、実物を触るようにする。次に、3音でできている単語（例えば、「つくえ」

など)についても同様に行う。今度は、盲幼児児童がつくえを触り、教師が「つ・く」まで言い、盲幼児児童に「え」と言うように促す。このとき、教師は「つ・く」と言いながら自分の手を二つたたき、三つ目は盲幼児児童が「え」と言うようにする。

(2) 「音数遊び」

〈ねらい〉

音の数を意識する。

〈内容〉

「いす」を触り「い・す」と言いながら手をたたき、音の数を確かめる。教師が「タタ」と言って2音の言葉を探すようにし、「タタタ」と言って3音の言葉を探すというような方法もある。タンブリンやカスタネットなど、楽器を使ってもよい。少ない音数から多い音数へと発展するようにする。また、言葉とともに具体物にも触るようにする。

(3) 「言葉集め」

〈ねらい〉

単語の初めの音を意識する。

〈内容〉

『あ』の付く言葉には、「どんなものがありますか。」の指示に従って「あし」、「あめ」、「あたま」などのように「あ」の付く言葉を集める。同様にして「い」の付く言葉、「さ」の付く言葉などを探す。次に、「先生が『さ』の付く言葉をたくさん言います。もし『さ』の付かない言葉を言ったら笛をピッと吹いて下さい。」と約束し、「さくら、さる、さんかく、たいこ」と言い「たいこ」の後に笛をピッと吹くようにする。

(4) 「しり取り遊び」

〈ねらい〉

- ・初めの音、終わりの音を意識する。
- ・同じ音、違う音の区別ができるようにする。

〈内容〉

一般に行われている「しり取り遊び」であるが、盲幼児児童がルールを理解できるまでは、教師が適切な指示をする。

【留意事項】

(1) ここであげた4つの課題は、指導の順序を示すものではない。盲幼児

児童の様子を見ながら適宜取り上げる。

- (2) 単語を構成している音ごとに区切ってゆっくり発音するよう促す。その場合、音と合わせて手や太鼓でリズム打ちをすると効果的である。
- (3) 「ペ・ツ・ト」(3音)、「し・ん・ぶ・ん」(4音)、「しょ・ー・ぼ・ー・しゃ」(5音)などのように、撥音、促音、長音なども1音であることを、積み木や磁石などを音の数だけ並べるモデリングなどで理解するようにすることが必要である。この場合、リズム打ちを併せて用いてもよい。
- (4) 1音1音を正しく発音するよう促す場合、発音があいまいになりやすい音を取り出して「口の体操」などとして発音練習をするのもよい。例えば、「アエイウエオアオ、カケキクケコココ……」などと毎日少しずつ唱えたりするのもよい。また、口の前に手を置いたりして発音するよう促し、呼気を強く出させるのもよい。さらに発音があいまいになりやすいバ行やマ行や、サ行、タ行、ナ行、ラ行などを組み合わせた単語を分解・構成の教材として用いるとよい(例えば、バラ、ぶた、ばね、バナナ、たなばた等)。

第6節 象徴機能の学習と点字学習への動機付け

本節では、象徴機能の学習と記号としての点字の学習への動機付けの課題を取り上げる。

まず、物の一部分の属性を手掛かりとして、それが何であることを予測できることを前提に、「ごっこ遊び」や触る絵本などを用いて、象徴機能の遊びができることを確かめる課題を取り上げる。

次に、名札の役割を果たすマークを用いて、自分や友達の名前が分かるようにした上で、それに点字を重ねて、自然な形でマークから点字への移行ができるようにする。さらに、身の回りの物の名前と点字カードとを結び付け、点字が有用なものであることを実感できるようにすることによって、点字学習への動機付けを図る指導方法を取り上げる。

1 象徴機能の学習

言葉は象徴機能の一つであるから記号と実体との対応関係を意識できるようにすることが大切である。まず、実体の一部が全体を代表するという